

鸚
鵡
小
町

季は 地は ワキ
シテ 勅使
三月 近江 小野小町

「是は陽成院に仕へ奉る新大納言行家にて候。さて
も我君敷島の道に御心を懸けられ。普く歌を撰ぜ
られ候へども。叡慮に叶ふ歌なし。こゝに出羽の
国小野の良実が娘に小野の小町。彼はならびなき
歌の上手にて候ふが。今は百年の姥となつて。関
寺辺に在る由聞し召し及ばれ。帝より御憐みの御
歌を下され候。其返歌により。重ねて題を下すべ
きとの宣旨に任せ。唯今関寺辺小野の小町が方へ
と急ぎ候。

シテ一聲
「身は一人。我は誰をか松坂や。四の宮河原四つの辻。
いつ又六つの街ならん。

サシ
「昔は芙蓉の花たりし身なれども。今は藜藿の草と
なる。顔ばせは憔悴と衰へ。膚は凍梨の梨の如し。
杖つくならでは力もなし。人を恨み身をかこち。
泣いつ笑うつ安からねば。物狂ひと人は言ふ。
「さりとては。捨てぬ命の身に添ひて。く。面影

につくも髪。斯からざりせばからじと。昔を恋ふる忍寐の。夢は寐覚の長き夜を。飽きはてたりな我心。／。

ワキ詞「如何に是なるは小町にあるか。

シテ詞「見奉れば雲の上人にてますか。小町と承り候ふかや何事にて候ふぞ。

ワキ「さて此程は聞くを住家と定めけるぞ。

シテ「誰留むるとはなけれども。唯関寺辺に日数を送り

候。

ワキ「実にく関寺は。さすがに都遠からで。閑居には面白き所なり。

シテ「前には牛馬の通路有つて。貴きも行き賤しきも過ぐ。

ワキ「後には靈験の山高うして。

シテ「しかも道もなく。

ワキ「春は。

シテ
「春霞。」

地「立ち出で見れば深山辺の。く。梢にかゝる白雲は。花かと見えて面白や。松風も匂ひ枕に花散りて。それとばかりに白雲の。色香おもしろき氣色かな。北に出づれば湖の。志賀辛崎の一つ松は。身の類ひなる物を。東に向へば有難や。石山の觀世音。瀬田の長橋は狂人の。つれなき命の。かるためしなるべし。」

シテ詞
「かくて都の恋しき時は。柴の菴に暫し留むべき友もなければ。便梨の杖にすがり。都路に出でゝものを乞ふ。乞ひ得ぬ時は涙の関寺に帰り候。」

ワキ詞
「如何に小町。さて今も歌をよみ候ふべきか。」

シテ
「我いにしへ百家仙洞の交はりたりし時こそ。事によそへて歌をもよみしが。今は花薄穂に出で初めて。霜のかゝれる有様にて。浮世にながらふるばかりにて候。」

ワキ 「實に尤道理なり。帝より御憐みの御歌を下されて

候ふ是々見候へ。

シテ 「何と帝より御憐みの御歌を下されたると候ふや。

あら有難や候。老眼と申し文字もさだかに見え分
かず候。それにて遊ばされ候へ。

ワキ 「さらば聞き候へ。

シテ 「如何にも高らかに遊ばされ候へ。

ワキ 「雲の上は。

シテ 「雲の上は。

ワキ 「雲の上は。有りし昔にかはらねど。見し玉だれの
内やゆかしき。

シテ 「あら面白の御歌や候。悲しやな古き流れを汲んで。
水上を正すとすれど。歌よむべしとも思はれず。
又申さぬ時は恐れなり。所詮此返歌を唯一字にて
申さう。

ワキ詞 「不思議の事を申す者かな。それ歌は三十一字を連

ねてだに。心の足らぬ歌もあるに。一字の返歌と

申す事。是も狂氣の故やらん。

シテ「いやぞと云ふ文字こそ返歌なれ。

ワキ「ぞと云ふ文字とはさて如何に。

シテ「さらば帝の御歌を。詠吟せさせ給ふべし。

ワキ「不審ながらも指し上げて。雲の上は有りし昔にかはらねど。見し玉だれの内やゆかしき。

シテ詞「さればこそ内やゆかしきを引きのけて。内ぞゆか

しきとよむ時は。小町がよみたる返歌なり。

ワキ「さて古もかかるためしの有るやらん。

シテ「なふ鸚鵡返しと云ふ事は。

地「此歌の様を申すなり。帝の御歌を。ばひ参らせて
よむ時は。天の恐れも如何ならん。和歌の道ならば。神もゆるしおはしませ。貴からずして高位に
交はると云ふ事。たゞ和歌の徳とかや。」。

地クリ「それ歌の様を尋ぬるに。長歌短歌旋頭歌。折句誹

シテサシ
「中んづく鸚鵡返しと云ふ事。唐に一つの鳥あり。

地
「其の名を鸚鵡と云へり。人の云ふ言葉を受けて。即ちおのが囀りとす。何ぞといへば何ぞと答ふ。鸚鵡の鳥の如くに。歌の返歌もかくの如くなれば。鸚鵡返しとは申すなり。

クセ
「実にや歌の様。語るに附けいにしへの。猶思はるゝはかなさよ。されば来し方の。代々の集めの歌人
家の書伝にも。しるし置き給へり。

シテ
「和歌の六義を尋ねしにも。

地
「小町が歌をこそ。たゞこと歌のためしに。引くのみか我ながら。美人の形も世に勝れ。余情の花と作られ。桃花雨を帶び。柳髪風にたをやかなり。紫笋なほ動きほこり。梨花は名のみなりしかど。

今憔悴と落ちぶれて。身体疲弊する。小町ぞあはれなりける。

ワキ詞「如何に小町。業平玉津島にて法楽の舞をまなび候へ。

シテ詞「さても業平玉津島に参り給ふと聞えしかば。我も同じく参らんと。都をばまだ夜をこめて稻荷山。葛葉の里も浦近く。和歌吹上にさしかゝり。

地「玉津島に参りつゝ。く。業平の舞の袖。思ひめ

ぐらす信夫摺。木賊色の狩衣に。大紋の袴の稜を取り。風折鳥帽子召されつゝ。

シテ「和光の光り玉津島。

地「廻らす袖や波がへり。(序の舞)

シテ「和歌の浦に。汐満ち来ればかたを浪の。

地「蘆辺をさして田鶴鳴き渡る鳴き渡る。

シテ「立つ名もよしなや忍音の。

地「立つ名もよしなや忍音の。月には愛でじ。

シテ 「是ぞ此。

地 「積れば人の。

シテ 「老となる物を。

地 「かほどに早き光りの陰の。時人を。待たぬ習ひと
は白波の。

シテ 「あら恋しの昔やな。

地 「かくて此日も暮れ行くまゝに。さらばと云ひて。
行家都に帰りければ。

シテ 「小町も今は是までなりと。

地 「杖にすがりてよろくと。立ち別れ行く袖の涙。
立ち別れ行く。袖の涙も関寺の。柴の菴に帰りけ
り。